

氏 名	丸 山 直 子
学 位	博士（文学）
学 位 記 番 号	博日乙 第8号
学位授与の日付	2018年 3 月12日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年 4 月 1 日文部省令第 9 号） 第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	書き言葉と話し言葉の格助詞 －コーパスと辞書の観点から－
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 近 藤 泰 弘 副 査 教 授 山 下 喜 代 副 査 准教授 澤 田 淳 副 査 国立国語研究所教授 小木曾 智 信

論 文 内 容 の 要 旨

丸 山 直 子

格助詞については、日本語教育・言語情報処理からの関心も高く、様々な観点から、様々な考察がなされてきた。しかし、それらの相互関係や優劣については、必ずしも明らかにされていない。また、コーパスによる調査・研究も始まったばかりである。

本稿では、それら先行研究を踏まえ、比較を行った上で、現代日本語の格助詞について、複合格助詞（格助詞相当複合辞）も含めて、個々の助詞の性質や、助詞同士の関連について明らかにすることを目標としている。コーパスを調査することで実態を計量的に把握した上で、いくつかのサンプル的枠組みを提示し、国語辞書への記述法を模索した。

第1章で示したように、形態論的アプローチ、統語論的アプローチ、意味論的アプローチ、運用論的アプローチの四つに整理して述べた。

第2章では、格助詞を巡る16の観点から、先行研究の概要と残された問題点を記した。

第3章では、形態論的アプローチとして、格助詞の形について論じた。何をもって格助詞とするか、複合格助詞（格助詞相当複合辞）をどのように位置づけるかを述べた。助詞について、語と見るか、語の中の形態素と見るかについては、広汎なものと結びつくかどうかや、独立性の高さから考えて、本稿では語と見る立場に立つ。副助詞や、一部の接続助詞には、語としての独立性に欠けるものもあるが、格助詞については、語と認定してよいと考える。

また、音声としての縮約・融合については、融合しているかどうかということと、単位の独立とは分けて考える立場である。「にて」→「で」は、既に「で」という格助詞が成立しているとして、「で」で一つの語と考える。「わたしゃ」は「わたし」＋「は」（係助詞）の融合形と考える。「歩いてる」も「歩く」＋「て」（接続助詞）＋「いる」と考える。

格助詞については、ガ・ヲ・ニ・ト・ヘ・ヨリ・カラ・デ・ノの9種を格助詞として認定する。議論のあるマデ・ハ・ヤは格助詞としない。それぞれ、マデは副助詞、ハは係助詞、ヤは並立助詞として扱う。ニ・ト・カラについては、その一部を格助詞と見ない考え方もあるが、並立のニ・トを除いて、全て格助詞として考える。

複合格助詞（格助詞相当複合辞）については、どこまでを複合辞と認めるか、議論がある。文法化の段階に違いがあると思われるし、格助詞と同じように格成分を形作っていると言えるもの、言えないもの、いくつか種類が分かれる。観点としては、1）格助詞と置き換えられるか、2）他にどのような格成分と共起しているか、等で文の中の位置づけが変わる。格助詞に置き換えられ、他に類似の格成分がなければ、格成分に近い存在となる。「解決策について考える」は「解決策を考える」と似ているということになる。但し、「解決策について、細かい点を考える」になると、「解決策」は、より周辺的な成分となる。本稿では、近藤（2011）で「複合格助詞」として挙げているもののみを扱う。

第4章では、統語論的アプローチとして、日本語の格・格成分について考察した上で、動詞の自他と格パターンについて考えた。

自他については、これまで和語の自他対応についての議論が多かったが、漢語についても議論すべきであり、その際、コーパスの情報も有効であることを述べた。辞書情報とコーパスの情報を突き合わせて、自他の認定についての考え方を示した。まず、自他のゆれには以下の四つにパターンがあることを指摘した。

- ①「する」を省略して用いるうちに、自他両用になったと思われる動詞。

Yが完備する

XがYヲ完備する

- ②対象をヲ格で取るか、ニ格で取るかのゆれがあるもの。

XがYヲ／ニ納得する

- ③元々目的語を含んでいる漢語が、その目的語の下位語を目的語に取ることで他動詞化したもの。

Xが発病する

XがYヲ発病する

- ④ヲ格の解釈によって自他がゆれるもの。

起点・経過点を表すヲ格をとるものを自動詞と考えるのが一般的であるため、そのヲ格が起点・経過点を表すかどうか問題となる。

5冊の辞書の比較を行い、コーパスによる実際の使用状況も考慮して、国語辞書の自他記述の提案を行った。

格パターンについては、格パターンを載せている二つの国語辞典と対比させながら、より理想的な記述法を模索した。国語辞典に記述する方法としては、①格パターンとして記述する、②語釈の中に盛り込む、③用例として記述する、という三通りが存在する。

- ①格パターンとして記述する。下記のような形で記述する。

例：[モノヲ、モノデ]

- ②語釈の中に盛り込む。

例：「手・棒などで」

例：「《～の形で》」

- ③用例として記述する。

例：「ストーブであたためる」

格成分としての必須度と、説明の理解のための必要度を考え合わせ、3種の記述法を駆使する必要があることを述べた。

自他についても、格パターンについても、具体的な語について、実際の辞書への記載を念頭においた考察を行った。

第5章では、意味論的アプローチとして、意味役割（深層格）、辞書における意味

記述について考えた。日本語記述文法研究会の枠組みを基礎としつつ、それを修正した案を提示した。これまでの研究を比較対照することも一つの目標とし、比較対照のためのリトマス試験紙になるような文例集を作成した。

まず、個々の格助詞について、意味役割と、その決め手を記述した。意味役割は、述語と、格助詞の前の名詞との関係によって決まる。述語（V）だけで決まる場合と、名詞（N）だけで決まる場合、両者の組み合わせで決まる場合がある。その辺りを、かなり細かく記述した。また、意味役割を樹状の図で示すことにより、意味関係が階層構造で捉えられるようにした。

また、格助詞同士の関係、格助詞と複合格助詞の関係についても意味論の観点から記述した。これらを検討するに際して、浮かび上がってきた概念が、格の複数性と、格の段階性である。

格の複数性には、以下の五種類がある。

1. 同一格助詞における多義性、多重性、連続性

1-1. 多義性・同じ形式で複数の意味関係を表す。事柄が異なる。

例：「母にもらう」に二つの解釈がある件

「母からもらう」の解釈<起点としての相手>

「母に対してもらう」の解釈<着点としての相手>

1-2. 多重性・複数の解釈が可能だが、事柄としては同一のもの。「八（且つ）」で表せるもの。

例：「冷蔵庫で冷やす」には<場所>と<道具>の二つの解釈が可能。

1-3. 連続性・前項（名詞）・後項（動詞）によって、連続性が生じる。

例：「東京で冷やす」は<場所>

「冷蔵庫で冷やす」は<場所>^<道具>

「アイスノンで冷やす」は<道具>

2. 異なる格助詞における意味役割の類似性、組み合わせの類似性

2-1. 意味役割の類似性・異なる格助詞が似通った意味役割を担うもの。

例：「試合に／で勝つ」「彼に／からもらう」

2-2. 組み合わせの類似性・名詞・動詞の組み合わせは同じだが、焦点が異なるもの。

例：「～を目標に置く」「～に目標を置く」

「壁をペンキで塗る」「壁にペンキを塗る」

格の段階性とは、格成分と述語との結びつきの強さに3段階あるという主張である。

1. 述語の格成分となるもの。述語の格パターンとして記述できる。

降る：ガ格 「雨が降る」

読む：ガ格、ヲ格 「私が本を読む」

与える：ガ格、ニ格、ヲ格 「親が子供に本を与える」

2. 小さくかかるもの。

2-1. 述語の部分になる。

「気をつける」全体で、ガ格とニ格をとる

2-2. ハガ構文のガの成分

「象は鼻が長い」・「象は」は「鼻が長い」全体にかかる。この場合の「鼻が」は、より小さく係っている。

3. 大きくかかるもの。文全体にかかる。

状況成分

「お忙しい中をありがとうございます。」

「電話を掛けようとしたところへ彼が訪ねてきた」

目的・役割・様態の成分

「お礼に歌を歌う」

メタ表現

「早い話が、」「望月の話では」「私の考えでは」「殿の仰せでは」

「彼の話では、～だそうです。」

ハガ構文

「象は」は「鼻が長い」全体に係る。「長い」という述語に係るものではない。

各述語に対する格成分として記述できるのは1の場合だけで、他の2と3は、記述法を考えなければならない。2については、まず小さな結びつきで一つの述語を形成し、その述語がどのような格をとるかを記述するのがよい。「心をくたく」全体がニ格をとるような記述である。3は、主題・状況成分にかかわるもので、格を離れたものになっていく。

第6章では、運用論的アプローチとして、文体（書き言葉・話し言葉、レジスター）との関係、実際の現れ方について考察した。格助詞のコーパスにおける使用実態を明

らかにし、さらに、複数性を有する格情報について、コロケーションの観点から論じた。文体（書き言葉・話し言葉、レジスター）との関係について、書き言葉vs.話し言葉というよりは、その中のレジスターの異なりの影響が大きいことがわかった。また、助詞の分布だけではなく、意味役割の分布についても、ニとデについて調査を行い、考察した。分類法による異なり、調査対象による異なりがあることが実証された。さらに、格の複数性について、コロケーションをもとに記述法を考え、コーパス情報を含んだ辞書記述の試案を提示した。

第7章では、周辺事象として、無助詞の現象、うなぎ文・こんにゃく文について述べた。格助詞が使われない現象であるが、格助詞の働きを考える上では無視できない現象である。

全体に、コーパスと辞書を用いて、格助詞・複合格助詞の機能を明らかにし、中でも、辞書の記述を充実させるための方策を考えたものである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

丸山直子氏より提出された博士学位申請論文「書き言葉と話し言葉の格助詞—コーパスと辞書の観点から—」は、全7章（序論・結論含む）、参考文献、以上206ページ、および付表3種（自他比較表、格パターン、格助詞対照表）66ページからなる日本語論文である。

日本語の格助詞研究は、明治時代の山田孝雄による格助詞の命名から始まり、非常に長い研究史がある。いわゆる学校文法においても、「格助詞」の記述は重要な位置を占める。また、日本語学や国語教育の分野だけでなく、外国人に対する日本語教育や、また特に最近では、工学的な自然言語処理の分野でも広く研究されているが、未だ、格助詞についての研究全般には探求すべき問題が多く残されている。本論文は、格助詞全般の用法を、総合的な見地から記述し、辞書編纂という目的からどのような体系性を与えるのが最適かについて考究したものである。従って本論は、文法研究であると同時に、助詞という特殊な単語の辞書への記載方法の語彙的研究でもある。以下では、まず論文の各章を簡単に紹介し、その後に、審査において出された意見を述べることにする。

第1章では、研究の背景と目的を述べる。『岩波国語辞典』（6版・7版）の改訂作

業における格情報を含む例文の充実が一つの目標であったことを述べる。また、全体として、①これまでの国語辞書における格情報の記述方法の精査②格の性質の段階性の記述複数性についての分析③コーパスの調査④国語辞書の情報などを対照表としてまとめることなどを目的とする。また、全体の構成を形態論的アプローチ・統語論的アプローチ・意味論的アプローチ、運用論的アプローチに分け、それぞれを記述するという方針を示した。

第2章では、先行研究の概要と残された問題点を示している。格助詞研究の分野を16の分野に分けて、今までの研究の評価を行い、それぞれの研究課題を指摘する。その主なものを紹介すると、いわゆる四大文法における格・格助詞の定義を挙げ、特に山田孝雄の貢献が大きかったことを示す。次に、その後の文法論における研究を紹介し、言語の能格言語、対格言語による分類も格の記述に深い関係があることを述べる。また同時に、自然言語処理の立場から作られた、IPAL辞書、EDR電子化辞書を紹介する。また、格をめぐる様々な概念（主語・格・主題）等の研究の概要を述べた。また、近年注目されている複合辞やコロケーション研究との関わり等についても触れている。第2章は、全体として以下の章で述べられることの序説ともなっている。

第3章では、形態論的アプローチとして、格助詞の品詞として単位の問題を取り扱う。単語の定義としては、主に服部四郎の説により、格助詞は、「附属語」として単語扱いにすることを述べる。また、本研究における「格助詞」については、語として扱うことを決定し、格助詞・副助詞・係助詞・接続助詞・終助詞・間投助詞・連体助詞・準体助詞・並立助詞の9分類を立てている。また、格の中でも連体格・並立格は性質の違うものであるとして、いわゆる連用格の、ガ・ヲ・ニ・ト・ヘ・ヨリ・カラ・デ・ノを格助詞とした。また、それとは別に、格助詞相当複合辞を選定し、それぞれの持つ意味特性を決定した。この章までの記述によって、以下の4章以下で扱う対象の範囲を決定することともなっている。

第4章以下が本論文の中心的部分となる。4章では統語論的アプローチとして、特に、『岩波国語辞典』を中心に、動詞の自他の定義とその記述方法について述べる。ついて特に留意された格助詞の自他についての論が行ってあるが、その部分がひとつの中心である。そこでは、種々の統語的な対応から、自他の揺れがあるものについて、個々の格パターンを検討し、変異のタイプを分類している。「決心する」「取材する」「投資する」など、従来自動詞と思われていたものを、自動詞・他動詞兼用動詞とするなど、今回の研究によって変更した点も多い。また、格パターンとして、577語の代表

的な動詞をもとに、その記述を行った。デ格をひとつの中心として研究し、まだ辞書に記述するには問題点が残されていることを指摘し、『岩波国語辞典』では、格パターンをそのままでは記述しないことにしたが、語義の説明文の中にその知見を応用したことを述べる。

第5章では意味論的アプローチとして、格助詞の意味役割の記述という大きな問題についての提案を行っている。意味役割の分類と分析によって、ガ・ヲ・ニの主要3格を始め、すべての格助詞について詳細に分類整理したことは、従来の研究を大きく越えたものであり、本論文の中核的部分であると評価できる。それぞれの格について、先行研究を複数紹介し、更に実際の国語辞典編纂資料を用いて、その認定の方法についての具体的な提案を行っている。例えば、デについては、場・時・手段・起因（根拠）・様態の5つに大きく分類し、さらに場を、動きの場所・領域・動作主などに分けるなど、従来の意味役割の分類では見られなかった多様性を明らかにしていることには注目される。また、最後に複合辞の格助詞（を通じて・にあたって、等）を同様な意味役割によって分類し、単純格助詞との総合的体系を記述することにも成功している。

第6章では、運用論的アプローチとして、国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパスと、話し言葉コーパスを利用して、それぞれの位相における格助詞の分布などを記述している。その結果、準体助詞の「の」など、特に論文や学会講演といったジャンルに頻出するものがあることを述べ、格助詞という論理的关系を示す助詞が、レジスター（位相の異なる調査対象）の性質にも制約されているという新しい知見を示している。また、ひとつの格助詞を多くの役割に用いることができる場合、また、逆にひとつの役割に複数の格助詞を用いることができる場合を示し、それを格の「複数性」と定義し、それぞれに対応した辞書記述のあり方を示している。

第7章では、格助詞がない表現の具体的な諸相を捉え、格助詞が無形化したものと、格関係を越えた主題的なものとの二種類に分かれることを示した。具体的にコーパスを用いた助詞の無形化の研究はこれが初めてであり、本論文のひとつの大きな成果と言えるだろう。

ここまで各章について述べてきたが、全体としての本論文は、計量国語学会の機関誌の『計量国語学』、日本語文法学会の機関誌の『日本語文法』等に収載された申請者の論文をもとに、根本的に改編して構成されているものである。辞書編纂の方法という具体的な課題を、格助詞の記述という文法的な側面から解明しようと試みたものであると判断される。

本論文について、審査委員からの意見としては、格助詞の定義について、特に複合格助詞の場合など、理論的には未だ十分ではない点が指摘された。また、格助詞「で」については、もともと語源として「にて」が想定されるなど、他の格助詞との性格の違いがあることをさらに重視するべきであるという指摘があった。また、複合格助詞の認定方法や記述について今後の課題が示された。これらいくつかの研究課題を残すものの、従来型の理論による文法論文とは異なり、本論文がコーパスや電子的語彙集を元に論を展開しているものであること、辞書編集上の新しい方法論を提示していることが高く評価された。今後、人工知能研究が進むにつれて、本研究のような助詞個々の性格についての情報提供が非常に重要になると思われる。本論のように、辞書編纂者が、その立場を生かして、その編纂資料を駆使して文法記述を行ったものは、これまで例がなく、本論文の意義は極めて大きいということが認められる。

以上の所見を総合的に判断した結果、審査委員一同は、丸山直子氏による本論文が博士（文学）の学位を授与されるに値すると判定する。